

## 中島俊郎先生のご退職によせて

英語英米文学科教授 井野瀬 久美恵

中島俊郎先生は、2018年3月末をもって定年退職されます。先生は、1973年3月に甲南大学文学部英文科を卒業され、同年4月に甲南大学大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程に進学、1978年3月に甲南大学大学院人文科学研究科英文学専攻博士後期課程を単位取得退学後、1980年4月に甲南大学文学部英文学科に専任講師として着任されました。その後、1985年4月に助教授となり、1993年からは英語英米文学科（1995年4月に英文学科から改称）教授として、現在に至っております。文字通りの「甲南潰け」で、ご退職の暁には37年間の長きにわたって甲南大学に奉職されたこととなります。

その間、英語英米文学科主任、大学院英語英米文学専攻主任をはじめ、国際交流関連の諸委員会（国際交流助成運営・国際交流センター運営・「甲南－イリノイ夏期英語講座」実施）や伊藤忠兵衛基金出版助成委員会、広報編集委員会、図書館商議委員会など、数多くの委員会で委員を務められ、職責を全うされました。

先生のご専門は、ヴィクトリア朝時代を中心とする文学と文化であり、特に視覚芸術との関連、並びに同時代の明治日本との交流史など、独自の視点から19世紀イギリスの社会と文化を幅広く捉える研究を重ねてこられました。

1991年以来同僚となり、先生と同じヴィクトリア朝の歴史やその知的風土への関心を共有する研究者でもある私には、中島先生の研究テーマや作風を大きく飛躍させたのは、1996年から1997年にかけての在外研究であったように思われます。この時期、先生は、オクスフォード大学コーパス・クリティ・カレッジの研究者として、イギリス屈指の歴史家キース・トマスのもとで研鑽を積まれました。それ以前から、環境論の古典ともいえるキース・トマスの『人間と自然界——近代イギリスにおける自然観の変遷』（法政大学出版会、1989年）の共訳者として、キースとの縁は深かった先生が、とりわけキースの方法論に強い影響を受けたことは、帰国後、独自に編纂、翻訳したキース・トマスの論文集『歴史と文学——イギリス近代史論集』（み

すず書房、2001年）から鮮明に読みとれます。

在外研究の成果は、その後の著作、とりわけ国際的学術雑誌での論文掲載に生かされるとともに、中島先生の資料を見る目を鍛えたと思われ、研究資料の発掘とその翻訳・復刻は、先生の業績のなかでもひととき異彩を放っています。ヴィクトリア朝写真史における異色の存在、ジュリア・マーガレット・キャメロン夫人の写真技法の資料解説（2004年）を皮切りに、ヴィクトリア朝以降、20世紀に入っても売れつづけた家政書としてあまりにも有名なイザベル・ビートンの夫、サミュエルが編集した雑誌『英国婦人家庭画報』（全4巻、ユーリカ・プレス、2005年）、美術史家マリオ・プラーツのイギリス文学・歴史・美術関連著作を集めた『イギリス文学論集』（全10巻、ユーリカ・プレス、2008-09年）の復刻はその好例でしょう。さらには、ヴィクトリア朝時代、イギリス文化・精神とのつながりを深めて良質のガイドブックが続々と出版された湖水地方関係の著作復刻とその解説『ヴィクトリア朝時代の湖水地方案内』（全6巻、ユーリカ・プレス、2013年）には、先生のヴィクトリア朝文化を見る視座が多様・多層に刻印されています。ヴィクトリア朝文化史に注がれる先生の鋭い眼は、こうした翻刻と併行して進められたルーシー・ワースリーの翻訳『暮らしのイギリス史——王侯から庶民まで』『イギリス風殺人事件の愉しみ方』（共訳、NTT出版、2013年、2015年）にも刻まれています。

「旅」を文化として捉える姿勢は、ヴィクトリア朝という時代への関心であると同時に、資料を求めてその時空に分け入った中島先生自身の研究人生そのものだといっても過言ではないでしょう。それを研究者以外の読者に向けても描ききることのできる先生の筆の力は、『イギリス的風景——教養の旅から感性の旅へ』（NTT出版、2007年）や『オクスフォード古書修行——書物が語るイギリス文化史』（NTT出版、2011年）といった質の高い一般教養書にも明らかです。またイギリス文化史の手法を駆使して書かれた地域誌『岡本 わが町』（神戸新聞総合センター、2015）にも、

先生のユニークな視点がいかに発揮されています。

先生は2001年に設立された日本ヴィクトリア朝文化研究学会の創設以来のメンバーであり、学会誌『ヴィクトリア朝文化研究』の編集長（2014-15年）として、学会誌の内容刷新と充実に尽力されました。

こうした先生の研究活動を貫くのは、丁寧で慎重、そして深遠な英文読解の力であることは言うまでもありません。それは、ユニークな資料紹介とともに、そのまま学生指導に生かされました。「英米文化・文学入門」「イギリス文学探訪」といった講義での先生の軽妙な語り口、人なつこい笑顔は、学生たちの「知的+アルファ」の好奇心を大いに刺激し、中島ゼミは常に満員御礼。先生が紹介する豊かな資料との出会い

は、学生たちにとって知の世界に目覚める扉であったことでしょう。それは、副査として同席した卒論試問の様子からも容易にうかがい知ることができました。

同僚のみならず、学生からも「俊郎先生」と慕われた中島先生。四半世紀を超える時間を先生の同僚として過ごせたことを光栄に思います。なんと幸せなことでしょう。ほんとうにありがとうございました。

目下、先生は、「ウォーキングの文化史」をテーマに、新たな本の刊行を計画中とお聞きしております。いまだ衰えないヴィクトリア朝という時代への探求心には敬服するばかりです。

俊郎先生、次回作も楽しみにしています！